

地域社会の変遷と現状から未来像を考える

—愛媛県西条市大保木地区を事例として—

阿部 萌

キーワード：限界集落、生業、地域資源、山間集落、生活支援、

1. 背景と目的

日本各地で高齢化や過疎化が進行し、住民の平均年齢が65歳以上である限界集落が全国に10,091カ所存在している。しかし一言で限界集落と言っても、その実態は千差万別である。一般に限界集落というと疲弊した暗い場所というイメージが持たれがちだが、全ての集落にそのイメージに当てはまるわけではない。ゆえに集落について議論する際は、対象集落のことを丹念に調べる必要がある。本研究では愛媛県西条市大保木地区という山間の限界集落において、地域の暮らしや生業の変遷及び現状を調べ、地域の現状をしっかりと把握したうえで、それを元に大保木地区の未来像に関する考察を行う。

2. 大保木地区の暮らしと生業の変遷及び現状

文献調査・フィールドワークの結果、昭和30年頃までは林業や焼畑などを行いながら山の資源を活用した自給自足的な生活が営まれていたことが分かった。高度経済成長期以降は多くの住民が街へ移住したため、人口が激減し高齢化・過疎化が進んでいる。しかし現在も自ら望んで大保木地区に住み続けている住民が100人程おり、彼らは山での静かな暮らしに幸せを感じている。公民館を中心とした行事も盛んだ。体が動いて元気なうちは山に住み続けたいと言う人が多い。大保木地区は限界集落だが、決して暗く疲弊した場所ではない。

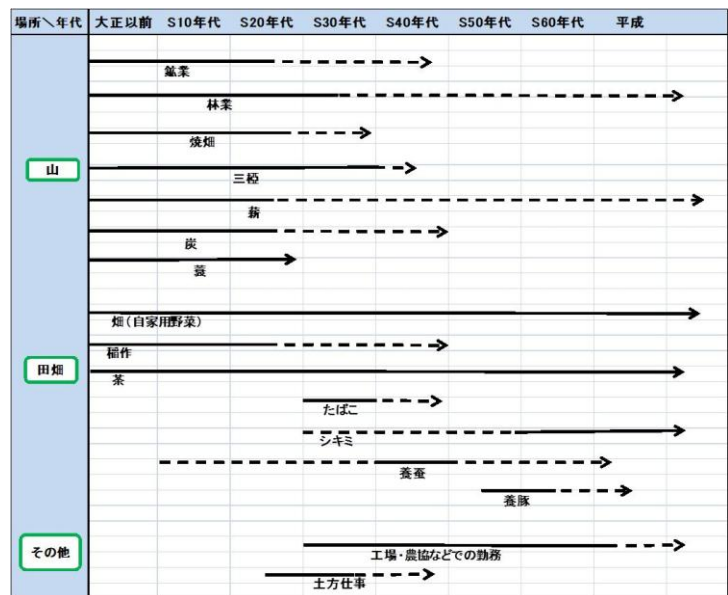


図 大保木地区における生業の変遷 (点線は生業の衰退を表す)

3. 大保木地区の未来像

今後必要となるのは住民の安全・安心な生活のサポートや資源としての森林や伝統・文化の保全であると考えられる。特に今後一層の過疎化と高齢化が進行すると予想されるなか、住民生活のサポートは重要である。具体的には地域コミュニティの中心である公民館の存続や、住民の足の確保のためのデマンド型乗合タクシーの導入などが必要であると考えられる。ただし留意しなければならないのは、住民の多くは高齢であっても元気で自立しており、過剰なサポートは不要であるということだ。必要なのは安全・安心な生活のための必要最低限のサポートである。